



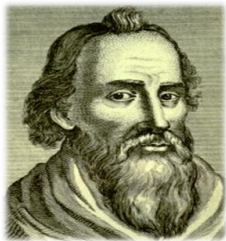
鬼と金棒

Capacity Before Power

永田円了

人は強くなりたいと願う。正しくありたい。役に立ちたい。壊れたくない。その願いが形を取った時、私たちは「金棒」を手に入れる。能力、成果、評価、肩書き、勝利。鬼に金棒とは、そうした状態を祝福した言葉である。だが、『人間発達理論』の視点で、この比喩を読み直すと、少し違った風景が立ち上がる。問題は、鬼が金棒を持つことなく、鬼が“金棒と一体化”してしまうことが問題なのである。

金棒が強力であればあるほど、鬼は自分を疑う必要がなくなる。正しさは外から与えられ、迷いは不要となる。スポーツヒーローが称賛のなかで育ち、引退後に自分を見失うことがあるのも、金棒が人格の代替をしてしまった結果だろう。そこに悪意や幼稚さを見出すのは簡単だが、本質はもっと構造的だ。内側が育たなかったのではなく、育つ必要がなかったのである。



古代ローマの詩人ユウェナリスは、「健全な精神は健全な肉体に宿る」と書いた。しかしそれは祈りであった。健全な肉体があっても、健全な精神が育つとは限らない。その危うさを、彼は直感的に知っていたのだろう。能力と人間の器は一致しない。だからこそ、人は祈る。

『成人発達理論』が語る成長も、同じ場所に立っている。心の器は、人為的に大きくすることはできない。教えて育つわけでも、努力すれば到達できるわけでもない。それは「オーガニックに起こる」変化だという。オーガニックとは、放っておけばよいという意味ではない。種を引っ張って芽を出させることはできないが、土を耕し、水を与えることはできる。違和感を消さずに抱え、正しさを急がず、問いの中に留まる。そうした時間の積み重なったある日、心の構造は起きてしまうように変わる。

「優しい人ほど発達が止まりやすい」、という逆説もここに重なる。優しさはしばしば、違和感を自分の中に飲み込み、問いを立てない形で機能する。「私が我慢すればいい」という善意は、器を守るが、広げはしない。壊れない器は、美しいが、成長しない。発達とは、強くなることでも、正しくなることでもない。壊れやすいまま、生きられるようになることなのである。

鬼は金棒を手放すとき、鬼は弱くなるのではない。自分の強さを、初めて眺められるようになる。そのとき優しさは義務ではなく選択になり、正しさは唯一の答えではなくなる。そこにこそ、人が成熟していくための静かな可能性があるように思う。

成長は操作できない。だが、起きる余地は耕せる。それが『成人発達理論』の、厳しく、そして深い希望なのではないだろうか。

<事 例>

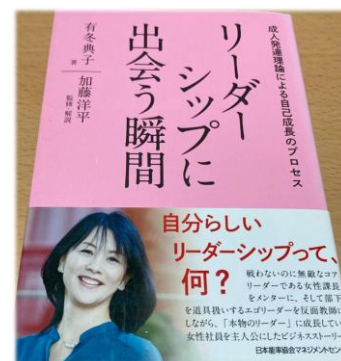
『スポーツ・ヒーローと性犯罪』 大修館

本田宗一郎 豊かな鬼と金棒をもったリーダー
ユング「ペルソナ」、本物の自分は仮面の内側に
宇崎竜童、自分をはずし続ける

渥美清「寅さん」、お面と自分が一体化した
ダライ・ラマ 14 世、お面をかぶらない“おじさん”

『成人発達理論』有冬典子氏語る ヒビキバより
大谷翔平 (31)、金棒よし、鬼もよし、NHK『メジャーリーガー大谷翔平 2025』“自分自身を対象化できている”

歌・キャロル・キング『You've Got A Friend』友だち



有冬典子、『成人発達理論』を語る